

地の故郷の山川が懐しく思い出された。シベリアの春の日も一日一日と暖かくなるにつれ、草木の芽も吹きはじめた。極寒の地とはいえども自然の草木は日本と変わらぬ。特にゼンマイのごときは太いものが山一面に出ていた。

また、野生のごぼう等、道路の端にたくさん見られた。作業帰りに各人採って、炊事場に運び、料理してもらったが、ゼンマイの連煮は渋くてこれには閉口した。山菜は豊富にあるのにと悔しがったが、後の祭りだった。

春も半ば過ぎると、下山して町の土木作業に狩り出された。そして徹底的に民主主義の勉強かと思われる事態が始まった。まず一キロくらい離れているアルチョの町に映画を見物に連れていかれた。題名はわからないが、ともに働きともに生産して喜び合うという画面を、時折り二、三回見た思いがした。この地区にて夏は土木作業にて明け暮れた。この地上作業にて苦しかったけれども、身体は回復しはじめた。

苦労を生き抜いた私どもも、十月に入ると二度目のダ

モイの話が来た。十月中旬、ダモイ話が事実になり、ソ連人から命令が出された。今度こそは本当に日本に帰れるのだとみな大喜びだった。あの第一回ダモイ話にて、送り返されて一年目、再度のダモイ、苦痛に耐えて生き抜いた仲間たちの喜び！

集結地に乗り込んだのは十月下旬、二度目の復員式を終わり、迎えに来た輸送船、興安丸に飛び乗り、さらばシベリアと日本海に乗り出し、夢に見た日本の国内地へと向かうとき、すでに十月二十七日、舞鶴の栈橋に上陸、故国に第一歩を踏みしめた心地、ああよかったと。

「かつて」は炭鉱の町ラーゲルの丘の上に二百八十余人の霊が眠っているのだと思うと、心が傷む。

抑留記 “戦犯収容”

栃木県 奈良 大吉

第二次世界大戦後、目ざましい復興をし、世界一の経済大国、長寿国、そして平和と歴史は流れて四十余年。

戦後生まれの子供達も、自由と平和、豊かさをまんきつして成長、世代交代の時代ともいわれる現在。あの戦争、敗戦といういまわしい事実が風化されようとしている。だが「何のため」「どうして」というぎねんと、飢えと寒さ、洗脳という精神的くじゅうの連続、すべてが極限状態だった二年六か月の戦後強制抑留だけは、私の脳裏からはなれない。

昭和二十年八月十七日、当時住んでいた、旧満州国チハル市に進駐してきたソ連軍の、警務庁関係者の出願日時と場所を指定した布告に応ぜず、奥地から避難してきた同胞救済と支援などしていたが、翌二十一年一月十二日、自動小銃を持った数人のソ連兵に踏み込まれ「戦争犯罪人」として逮捕するとらちされ、旧日本軍のチハル憲兵本隊に収容されたのが強制抑留の始まりである。

昭和十六年一月、旧満州国治安部分室要員として採用され、吉林省警務庁外事股をへて龍江省警務庁分室に終戦まで勤務したが、そのことがソ連に対する反逆罪で戦争犯罪だということのようだった。当時の警務庁分室

は、対ソ機関であったが、そこに勤務していたというだけで戦争犯罪人だときめつけたソ連のやり方には、いままってなつくがいかない。

夜中に起こされ、取り調べを受けたが、もっぱらロシア語修得の有無、職業軍人の変身ではないかということが中心で「私は満州国にあった日本の秘密機関員で、ソ連に対する戦争行為に加担した」の供述調書へのサインを強制され続けて、約半月、二月はじめ貨車に乗せられチタ収容所に送られた。ここでは何の取り調べもなく、三月一日朝、若干のパンをあたえられ貨車に乗せられたまま放置され、三日後発車したが、その間何の支給もなく、空腹とどの渇き、天井に凍りついた氷のうまかったこと。それが飢えの始まりであった。

「ヤボン、ダモイ」と言われ、半信半疑ではあったが、かすかな望みを持った仲間も汽車が西に走っていることで絶望し、成り行きまかせの貨車旅行となった。途中約十日ほど、小さな収容所ですごし、約一か月の貨車旅行の終点がマルシヤンスク収容所であった。乞食同然の姿で到着した仲間は、旧満州国官吏、協和会関係職

員、関東庁官公吏、満鉄をはじめとする在満特殊法人職員と青少年開拓義務隊の少年の、約百余人の集団で、収容所内に二重に張られた有刺鉄線、監視塔から向けられた銃口におのき、先住約四千人の同胞とかくりされ、取り調べもなければ作業もない、明日のこともわからない不安の連続が五か月続いた。八月十五日、突然収容所正門前整列を命ぜられ呼び出しが始まった。私の番がくるまで約半数が右左にわけられていた。所長から、氏名、生年月日、父親の名前と職業、在満当時の職業地位をきかれ、それに答えたが「お前は満洲にあった日本の秘密機関員だ」と宣告された直後、所長の隣にいた政治部員らしい女性が所長と話し合っている言葉の中に「彼はオペレーターではないか」とききとれ、即座に「ヤー、オペレーター」と手をあげたら、所長は書類を見直していたが「ハラショー」と左側へ行くよう指示をした。在満当時白系露人事務局の日語班に關与したことがあり、その時おぼえたロシア語の日常会話が役立ったことになる。右側に整列させられた集団は、そのままどこかへ連れさられて行った。その中に在満当時世話に

なった先輩もいたが、それ以来消息はわからない。在満当時兼務した職種に暗号係があり、特信員と呼称していたのを通信員と間違ひ判断したのかもしれない。幸運とはそんなものだろうか。

八月十五日、通信員と判定されたためか、裁判にもかけられず収容所自体の農作業と、ときおり外出して駅の貨物の積降ろし作業などの収容所生活で、一般収容所とは作業内容など相違があったが、南京虫になやまされ、凍りつく寒気、乏しい食事、貧しい衣服、連夜のごとき学習には十分すぎるくじゅうと、くのうをなめさせられた。

昭和二十二年十一月一日、「ダモイ」と言われ貨車に乗せられ東進、十二月一日ナホトカ着、同地第二分所で越冬、製材工場で就労。昭和二十三年五月、舞鶴上陸で無事帰国した。